



犠 牲

サクリファイス

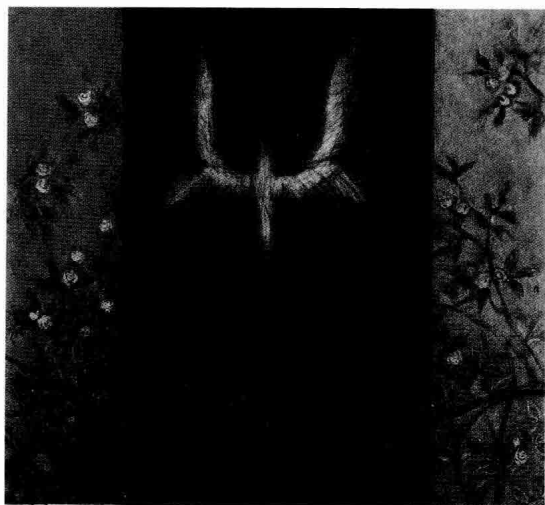
わが息子・脳死の11日

柳田邦男

犠サクリファイス牲

わが息子・脳死の11日

柳田邦男



著者略歴

1936年栃木県生まれ。1960年東京大学経済学部卒業後、NHK入社。放送記者として活躍したが、後退社して執筆活動に専念。1972年『マッハの恐怖』で第3回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。1979年『ガン回廊の朝』で第1回講談社ノンフィクション賞、1985年『撃墜（上・下）』でボーン上田国際記者賞受賞。主な作品に『零戦燃ゆ』『マリコ』『死の医学への序章』『事実の素顔』『空白の天気図』『日本は燃えているか』『ガン回廊の炎』がある。

犠牲

わが息子・脳死の11日

一九九五年七月三十日 第一刷
一九九五年九月十五日 第六刷

定価はカバーに表示してあります

著者 柳田 邦男

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京〇三三二六五二二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

© Kunio Yanagida 1995
ISBN4-16-350490-7

Printed in Japan

いのち 永遠にして

亡き洋二郎に捧ぐ

目次

百年の孤独 7

溢れる涙 26

断章・日記との対話 63

ぼく自身のための広告 99

断章・カフカの香り 138

夜間飛行

160

*

脳死・「二人称の死」の視点を

195

あとがき

235

装画 伊勢英子 『よだかの星』(講談社)より

表紙レイアウト 伊勢英子 (日記帳は柳田洋二郎氏のもの)

A D 坂田政則

サ
ク
リ
フ
ア
イ
ス
犧
牲

わ
が
息
子
・
脳
死
の
11
日

百年の孤独

百年の孤独

冷たい夏の日の夕暮れに、私の二十五歳になる次男洋二郎が、突然自ら死出の旅に出てしまった。

時は冷酷なまでに過ぎ去っていくが、彼の部屋だけは時間が凍結されてしまっている。

生前の状態のままにしてあるその部屋に入ると、ベッドサイドの小さなボックスの上に、読みかけの新潮文庫版カフカの『審判』と中公文庫版セリヌの『夜の果ての旅』、講談社から出版されて間もなかった遠藤周作氏の単行本『深い河』、それに漫画の『スヌーピー』一冊と『じやりん子チエ』三冊が、きちんと置かれたままになっている。そして、壁際の本棚には彼ならで

はの考えによって整然と並べられた、日本と外国の小説——その大部分は文庫本だが——がぎつしりと詰まっている。半分も読んだわけではないが、彼は自分の悩みや苦しきと波長が合いそうな作品を直感的に選り出すと、それをゆっくりと深く読むという読み方をしていた。

並べられたギリシャから現代に至る主要な小説の背表紙のタイトルを順に見ていくと、彼が私との会話で何度となく話題にしたことのあるいくつもの書名が目飛びこんでくる。ついこの間も、そのなかの一冊を、私は胸のいたみと懐かしさをないまぜにした複雑な気持ちで取り出してみた。

人間存在の亀裂を示すような、白地とブルー地で上下を不規則に分割した図柄の装幀の『新潮・現代世界の文学』の一冊、現代ラテンアメリカ文学を代表する作品といわれるコロンビアのノーベル文学賞受賞作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』だ。

大家族ブエンディアーア家の百年にわたる男たち女たちの生まれ・育ち・愛憎・孤独・死をめぐる暗澹たる運命を、伝奇的な挿話をまじえた古典的な小説形式で延々と微細に語ってゆくこの大作を、洋二郎は、多出する主要な登場人物たちのなじみにくいラテン系の名前を本の扉裏の白頁に細字でびっしりと書きこむほど、じつくりと読んでいたのを、私は知っていた。

私の最近の読書傾向はノンフィクション分野の作品に偏っていて、なかなか新しい時代の小説にまでは手を伸ばせないのだが、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』は、数年前に洋二郎にす

すめられて読み、この作品の凄さについて二人で語り合ったことがあった。私の家では、息子たちが幼かった頃の絵本や童話をはじめとして、家族史のこびりついた本が押し入れなどに保存されていて、稀にそういう本を取り出して、過ぎさった日々を懐かしむことがあるのだが、彼の本棚から『百年の孤独』を取り出したのも、それと似たような感情がからんでいたように思う。

そして、白いしおり紐のはさんである頁を、開いてみた。しおりをはさんだ者の残り香を嗅ぎ取ろうとして。

《ああ、やはりレメディオスの話のところだ》——それは彼が好きだといっていた場面が書かれてある頁だった。手を出した男どもに、次々に非業の死をもたらしたイノセントな白痴の小町娘レメディオスが、突然姿を消してしまう場面だ。

三月のある日の午後のことだった。紐に吊したシーツを庭でたたむために、フェルナンダが家じゅうの女に手助けを求めた。仕事にかかるかからないかに、アマランタは、小町娘のレメディオスの顔が透きとおって見えるほど異様に青白いことに気づいた。

「どこか、具合でも悪いの？」と尋ねた。

すると、シーツの向うはじを持っていた小町娘のレメディオスは、憐れむような微笑を浮かべて答えた。

「いいえ、その反対よ。こんなに気分がいいのは初めてだわ」

彼女がそう言ったとたんに、フェルナンダは光をはらんだ弱々しい風がその手からシーツを奪って、いっぱいそれを広げるのを見た。自分のペチコートのレース飾りが妖しくふるえるのを感じたアマランタが、よろけまいとして懸命にシーツにしがみついたその瞬間だった。小町娘のレメディオスの体がふわりと宙に浮きあがった。ほとんど盲に近かったが、ただ一人ウルスラだけが落着いて、この防ぎようのない風の本性を見きわめ、シーツを光の手にゆだねた。目まぐるしくはばたくシーツに包まれながら、別れの手を振っている小町娘のレメディオスの姿が見えた。彼女はシーツに抱かれて舞いあがり、黄金虫やダリヤの花のただよう風を見捨て、午後四時も終ろうとする風のなかを抜けて、もっとも高く飛ぶことのできる記憶の鳥でさえ追っていけないはるかな高みへ、永遠に姿を消した。(鼓直訳、新潮社版一八二頁より)

このくだりをあらためて読むうちに、私は、ふと思った。洋二郎がこの頁にしおり紐をはさんでおいたのは、単に気に入った文章をいつでも開いて見られるようにしたいというそんな気持ちだからではなく、自分自身の運命あるいはこの世との別れ方の予言をそこに見出していたからではないか、と。

実際、彼の立ち去り方は、日常の連続性からはあまりにも断絶していて、親としては、いまだに夢を見ているようで、彼は一陣の風に乗って空の彼方へ飛翔していったとでも説明されたほうが、はるかに現実感と説得力があるのだ。

それに最後の夜、それは一九九三年八月九日のことだったが、彼は私との会話でレメディオスが「こんなに気分がいいのは初めてだわ」といったのに似て、いつになく静かで落ち着きのあるやわらかい眼差しで、「なんだかすべての人が懐かしく思える。こんな気持は初めてだ。K先生には、『感謝』と伝えたいな」と、つぶやくようにいったのだった。K先生とは、彼が五年半も世話になっていた精神科医である。

玉川大学通信教育部の三年目で、サマースクーリングの最中だった。「女優の鈴木保奈美が『教育学演習』の同じ授業を受けているんだ。教室の前のほうまでさりげなく出て、顔を見ちゃった」などと、若者らしくはいでいた側面もあったけれど、一年目、二年目に比べると、しきりに疲労感を訴える日が多かった。安定剤や強い睡眠薬を使いながらスクーリングに通うのだから、だるくなるのは当然のことだったろうが、やはりそれだけでなく、生きることへの展望の喪失感が重くのしかかっていることが、からだ中に鉛を流しこんだような作用をしていたのだろう。とりわけその夜は、しんどそうにしている、精神的にも参っていた様子で、私と話をしながら話をまぎらそうとしたがっていた。それで午後九時半頃から十時半頃までだったろうか、私は彼

の部屋で学校のこと、将来のことなどについて、話し相手になっていたのだった。彼の精神が不安定なときには、私から具体的な助言が得られないと、かえっていらいらして身近にあるものを壁にたたきつけたり、家から飛び出して行ったりすることが多いのだが、その夜はベッドの上に座って壁に背をもたれかけ、時折、何かを懐かしく回想するような穏やかな眼さえていたのだ。言葉も少なかった。沈黙が続くと、彼は耐えられなくなつて感情を爆発させることがあるので、私はあまり言葉を先取りしないように気をつけながら、何かを静かに話していたと思う。その二時間半後に起こることを予想もしないで。——いや予想もしていなかったというのは、当然ならぬいかもしれない。いつか彼は決定的なことを実行するのではないかと、いつも私は頭のどこかで思い、その緊張のなかで五年半も過ぐしてきたのだから。

三か月ほど前、私はK先生から親の面接の場で厳しくいわれたことがあった。「子供が死にたいといったら、『そんなに死にたいなら死ね!』というくらい、父親の厳しさを示さなければ駄目ですよ」と。K先生は、父親たる者それくらいの覚悟をして臨めという意味でいったのだろう。わかりすぎる親を持つ子は不幸だ、子が自分のエゴを出せなくなるからだ、と、心理学の専門家がいうのを私は聞いていたから、私はK先生の言葉をもっともなことだと素直に受け止めた。

七月の下旬だったか、深夜、洋二郎が一階居間の食卓で資料の整理をしていた私のところへ来るなり、思いつめた目つきで、「もう駄目だ、死にたい」といって、ソファァーにどんと体を投げ

出した。妻もまた、ずっと前から心を病んでいたもので、二階の寝室で強い睡眠薬の助けを借りて眠っていた。一瞬《対決だ。ものわりのいい父親なんてやめた》という思いが私の全身を突き抜けた。私の責任編集で文藝春秋から刊行中だった『同時代ノンフィクション選集』最終巻の巻頭解説の原稿締め切りがぎりぎりの日程になっていたが、それどころではないと思った。私はすぐに立ち上がって、彼の真前のソファに座るや、彼の眼を正視して、「どうしても駄目か」といった。彼は「もういい、死に方を教えてくれ。死にそこねて苦しむのはいやだ、確実に死ぬ方法を知ってるだろう」と叫ぶようにいった。「わかった。親父として息子を殺すことはできない、自分の手ではな。だけど、そんなに死にたいなら、死に方ぐらい教えてやる。ダテや酔狂で五十何年も生きてきたんじゃないからな。ロープでもコードでも持ってきて、表に出ろ。連れてってやるから」私はもう本気でいっていた。多摩丘陵の住宅地なので、近くの森林に行けば、手ごろな木はいくらでもあった。私は地獄に突き落とされてもかまわないと思った。彼は「用意してくる」といって、二階の自分の部屋に上がって行った。五分か十分ほどして、ゆっくりと階段を降りてきた彼は、憔悴し切った様子でソファにぐったりと横になると、「きょうはやめた。葉を二回分のんだ」といった。私は全身から力が抜けた。何もいわずに終わった。言葉が見つからなかった。それから間もなく、スクーリングが始まったのだが、彼の精神的なコンディションは、強風にさらされた雪山の稜線を歩いているかのように、いつ転落してもおかしくない毎日だった。

男子だけのT中学に通っていた洋二郎は、二年の三学期に右眼にひどい怪我をした。昼休みに教室内で生徒たちがチョークのぶつけ合いをしていたのだが、午後の授業開始のベルが鳴ったので、全員が席についた。洋二郎も投げ合いをやめて席につこうとした。その瞬間、一個のチョークが飛んできて、洋二郎の右眼を直撃した。もうやめたと安心していただけから、避けることができなかった。

眼房内出血による激痛に襲われた洋二郎は、すぐに学校近くの眼科医に連れて行かれて、応急手当てを受けた。「大したことないから、自宅で眼を休ませていなさい。横になって寝ると眼圧が上がるから、今夜はずっと座ったままでいなさい。明日になっても痛むようだったら、また来なさい」というのが眼科医の指示だった。

学校からの連絡で、たまたま家にいた私が出かけ、タクシーで連れて帰った。夜になると、ソファに座ったままにしている、眼の痛みがひどくなるばかりか、激しい頭痛も生じ、何度も嘔吐した。時々眠りそうになっても姿勢が崩れるので、私も妻も徹夜で洋二郎の体を支え続けた。「こんなひどい怪我なのに、家で一晩中椅子に座っているというのはおかしいよ。あの眼科の開業医は、なんで入院可能な病院を紹介してくれなかったんだ」と、私は妻にいいながら、だんだん腹が立ってきたが、夜更けではどうしようもなかった。患者の家族というものは弱いものだ